

常三島遺跡の近世火葬墓

端野晋平*・米元史織**

*徳島大学埋蔵文化財調査室

**九州大学総合研究博物館

はじめに

徳島大学常三島キャンパスに所在する常三島遺跡は、近世徳島城下町跡のなかでも、武士が居住した屋敷地跡にあたることが知られている。ここではこれまで再開発に伴い、発掘調査が実施され、徳島藩の武家屋敷の一端が明らかにされてきた。そうしたなか、徳島大学埋蔵文化財調査室が1995・1996年度に実施した第3・5次調査（工学部光応用工学科棟地点）では、17世紀代の火葬墓が屋敷地内より検出された。最近になって、同調査室では、この火葬墓とそこから出土した遺物の整理作業を実施し、その結果、興味深い事実がいくつか明らかとなった。そこで本稿では、整理作業の結果をもとに、この火葬墓の被葬者像と造墓の背景について考察を行う。

1. 常三島遺跡の概要

A 歴史的環境

徳島大学では、常三島キャンパスおよび総合グラウンドの敷地内に所在する遺跡を、独自に常三島遺跡と呼んでいる。この遺跡は、四国の東半部を紀伊水道に向けて東流する吉野川河口付近のデルタ地帯に位置する（図1）。徳島城下町は、豊臣秀吉による四国平定後の天正11（1585）年、阿波国に入部した蜂須賀家政によって建設が進められた。城下町の中核となる城山の東側に位置する6島（徳島・寺島・福島・住吉島・常三島・出来島）には武家屋敷地が配置されたが、その中の一つ、常三島に形成されたのが、常三島遺跡である（図2）。常三島は、古文書と絵図によって、主として物頭以下の中・下級武士の屋敷地であったことが判明している。明治時代になると、この地一帯は、近世の街路区画が残されたまま、急速に水田化した後、徳島県尋常師範学校附属小学校や徳島大学工学部の前身である徳島高等工業学校が設置された。その後、太平洋戦争を経て、戦後まもなくしてから徳島大学常三島キャンパスが設定され、今日に至っている。

B 既往の調査

常三島キャンパスと総合グラウンドでは、再開発を原因として、2015年度までに計21次にわたる発掘調査が実施されている（図3）。その結果、近世にこの地に形成された徳島城下町常三島地区の様相が徐々に明らかにされつつある。本キャンパスは、南北に走る道路を境として、西側の総合科学部エリアと東側の工学部エリアに分けられる。発掘調査は工学部エリアで16次、総合科学部エリア

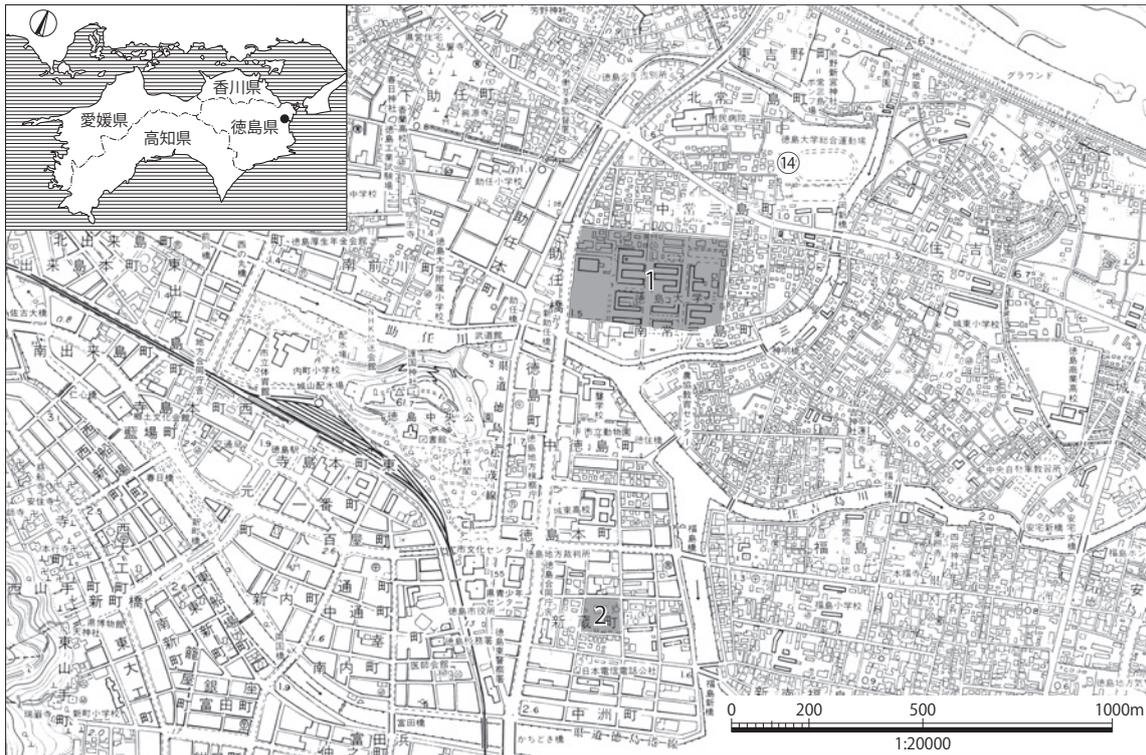


図1 常三島遺跡の位置

1. 常三島遺跡（常三島キャンパス） 2. 新蔵遺跡（新蔵キャンパス） ⑭は常三島遺跡第14次調査地点（国際航業株式会社調製『徳島市全図2』をもとに作成）

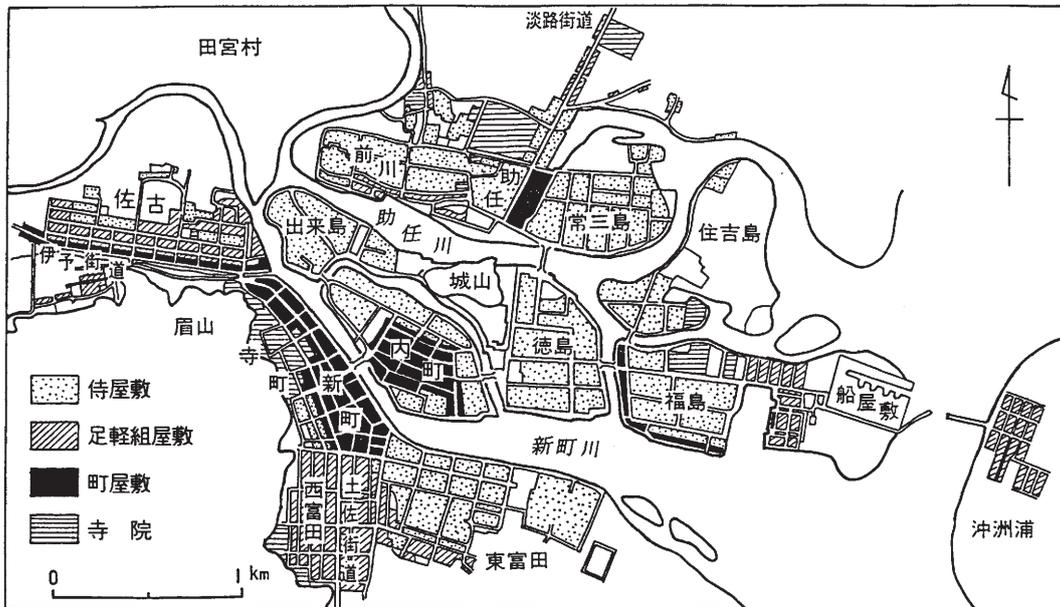
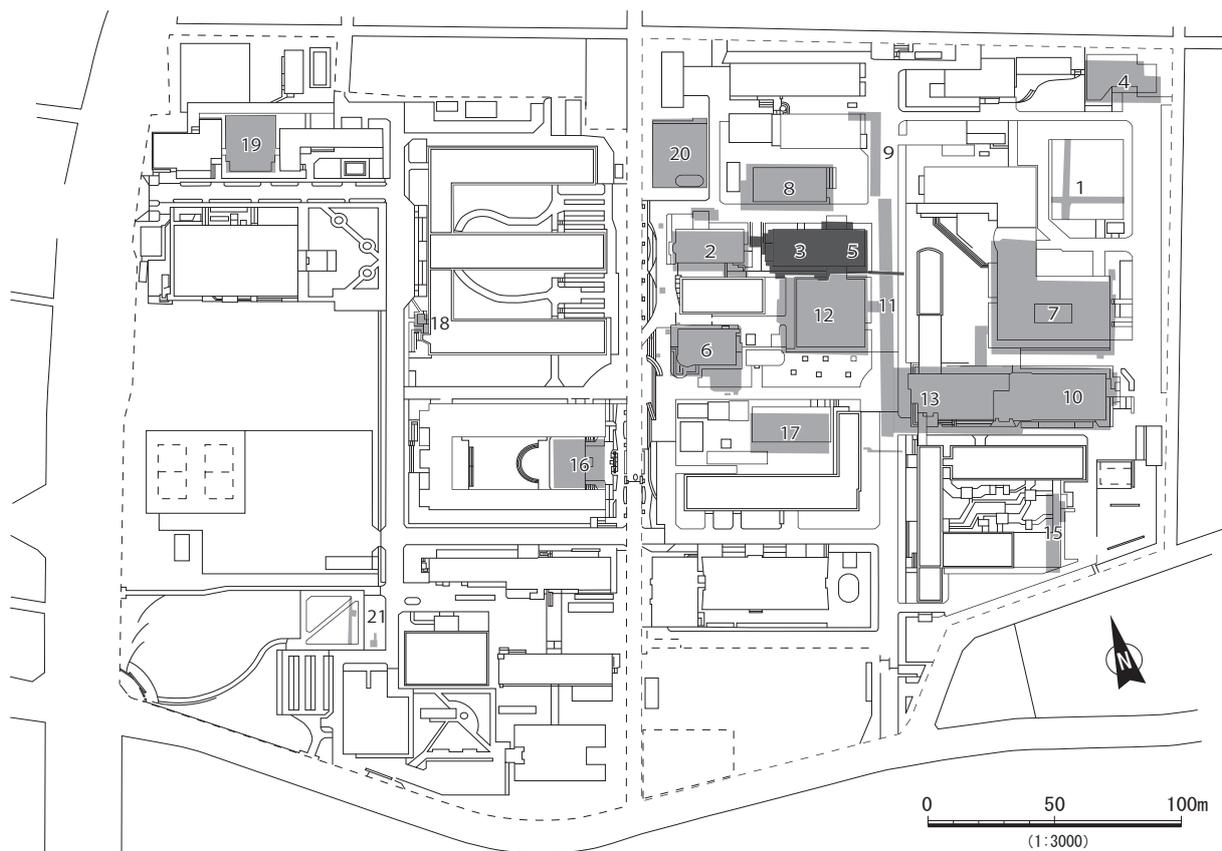


図2 寛文5（1665）年「阿波国渭津城之図」（徳島県立博物館所蔵）にみる徳島城下の町割（平井1995より引用）



- | | | |
|----------------------------|-------------------------|-------------------|
| 1. 工学部実習棟試掘 | 8. 総合情報処理センター | 16. 総合科学部3号館 |
| 2. 地域共同研究センター | 9. 共同溝 | 17. 工学部総合研究棟 |
| 3. 光応用工学科棟 | 10. 共通講義棟 I | 18. 総合科学部1号館エレベータ |
| 4. 工業会館 | 11. 共同溝 II | 19. 地域連携プラザ |
| 5. 光応用工学科棟-追加 | 12. 総合研究実験棟 | 20. フロンティア研究センター |
| 6. サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー | 13. 総合教育研究棟 (共同講義棟 II期) | 21. 地域創生・国際交流会館試掘 |
| 7. 機械工学科棟 | 15. 工学部実験研究棟 | * 番号は調査回数も兼ねる。 |

図3 常三島遺跡の発掘調査地点

で4次にわたって実施されている。また、キャンパスの北東に位置する総合グラウンドでは1次の調査が実施されている。これまでの調査では、屋敷を区画する溝（1・3・4・6・7・9・11・16・17・19次）、素掘り舟入状遺構（15次）、石組み舟入状遺構（15次）、呪的な性格を有する青銅製品埋納遺構（2次）などが検出されており、注目されている。また今日、徳島城下町跡を代表する遺物に数えられるしめなわ文茶碗の発見の契機となったのも、本遺跡の第2次調査である。本稿で報告する火葬墓は、第3・5次調査で検出されたものである。

2. 常三島遺跡第3・5次調査と火葬墓

A 常三島遺跡第3・5次調査

徳島大学では、常三島キャンパス・工学部エリアの北西部に位置する地点に、工学部光応用工学科棟を1996年度に建設する計画が提出された。この計画以前に、同キャンパスの北東部で実施された

第1次調査、予定地のすぐ西側で実施された第2次調査では、近世武家屋敷跡を中心とする良好な遺構が検出されていた。建設予定地でも同様の遺構の存在が予測されたため、1995年8月22日～1996年3月25日、1996年4月17日～5月30日の期間において、発掘調査を実施した。現在、正式報告書は未刊行であるため、以下、概要報告（徳大埋文委・徳大埋文調1997）にもとづいて、記述する。

発掘調査の結果、3面の遺構面が確認された。各遺構面に形成された遺構の時期はそれぞれ、第1遺構面は江戸後期～末期（18世紀後半～19世紀中頃）、第2遺構面は江戸中期（18世紀前半）、第3遺構面は江戸前期（17世紀代）と考えられる。遺構は、本稿で報告する火葬墓のほか、土坑160基、柱穴40基、井戸2基、溝10条、方形苑地1基、貝塚状土坑2基が検出された。

第1遺構面で検出された溝は、三つの屋敷地の境界部を表し、その居住者は、絵図と徳島藩士譜によって、以下のように推定できる（図4）。

A 地区 少なくとも江戸中期の享保年間以降、幕末までは佐野家の屋敷地と確認できる。

佐野家（玄真）：明暦3（1657）年召出。7人扶持15石～7人扶持20石。代々医師を世襲。

B 地区 18世紀末の寛政年間から幕末までは牧家の屋敷地であるが、18世紀後半は島山家の屋敷地となる。18世紀前半の享保年間以前は藤川家の屋敷地である。これら屋敷主のいずれもが徳島藩士譜に名を残していないという特徴がある。絵図から知られる屋敷主と年号は以下の通りである。

藤川家：元禄（17世紀後半）、享保（18世紀前半）

島山家：天明（1782～1786）

牧家（梶五郎）：寛政8年（1796）、文化・文政頃（19世紀前半）、安政年間（幕末）

C 地区 18世紀末の寛政期以降は真鍋家、それ以前の江戸中期は山下家の屋敷地であったと考えられる。

山下（与蔵）家：興源院様召出。7人扶持10石。初代は琵琶法師、御広間御番、道御奉行など。
天保5（1834）年以降不明。

真鍋（芳太郎）家：宝暦4（1754）年罷越。150石。奥小姓役。西の丸御番、佐渡小文次組。

屋敷境の溝やその周辺を中心として、陶磁器、木器、漆器、瓦などの遺物が多量に出土した。そのうち、最も数量の多い遺物は陶磁器である。そのほとんどは18世紀後半～幕末のもので占められるが、17～18世紀前半の遺物もある。陶磁器は、肥前・瀬戸・京・信楽・備前などを生産地とする広域流通品と、大谷焼のような阿波で作られ、狭い範囲で流通した製品がある。そのほか、淡路の珉平焼、阿波の庸八焼といった19世紀の一時期に作られた製品、伊予の砥部焼とみられる磁器も注目される。

B 火葬墓

火葬墓(SK145)は、第3遺構面の調査区東側で検出された（図4）。溝から推定される屋敷割でいえば、B地区に位置し、ここは絵図から17世紀後半には藤川家の屋敷地であったと考えられる。墓壇の平面形は長楕円形で、推定長約110cm、幅61cmを測る（図5）。断面形は箱形で、深さは14～17cmを測る。土層断面（図6）をみると、墓壇が掘り込まれたVII-2層の上面には、本火葬墓に向かって不自然な落ちがみられる。また、本火葬墓の墓壇の深さは、本来のものともみるには浅すぎる。これらの

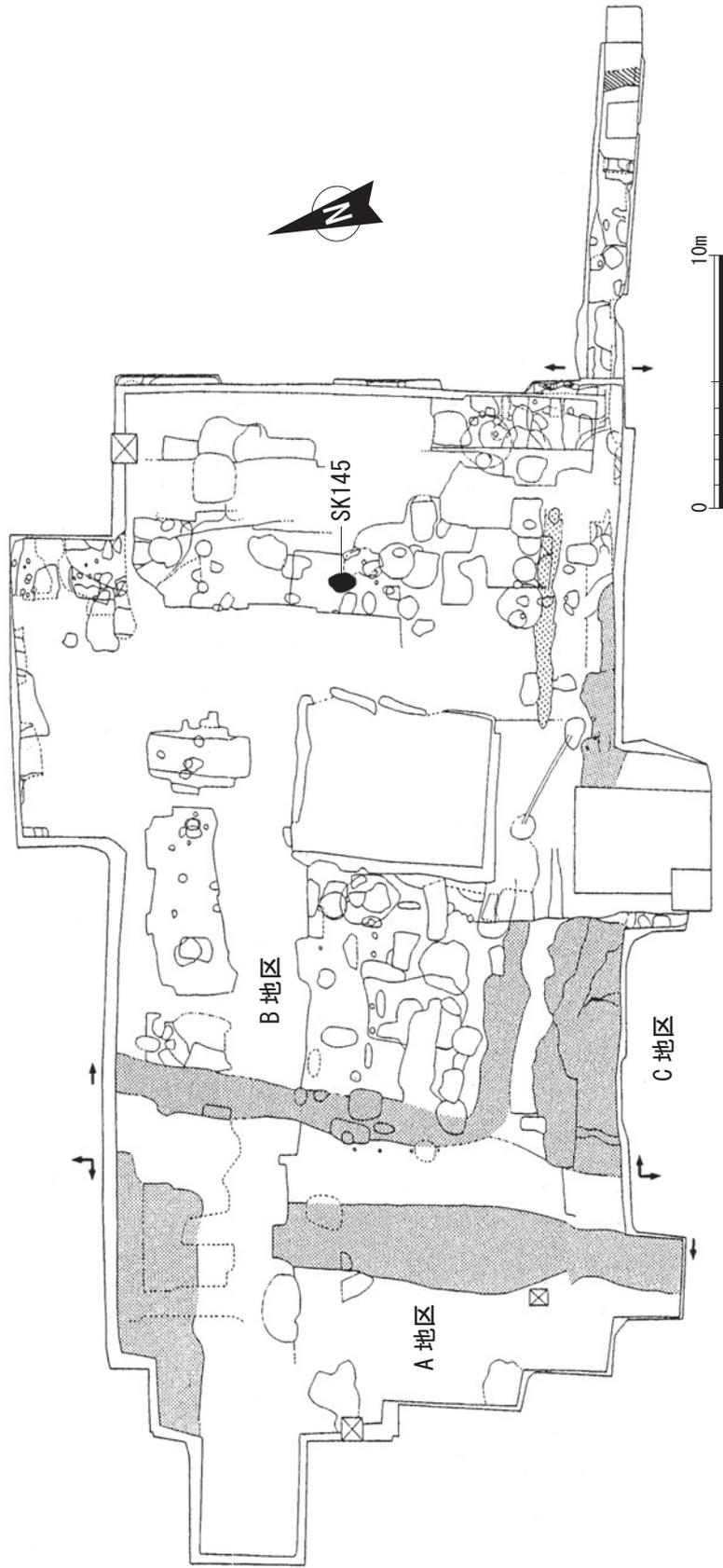


図4 常三島遺跡第3・5次調査地点遺構全体図
網掛けは屋敷境溝。(徳大埋文委・徳大埋文調 1997 より引用・改変)

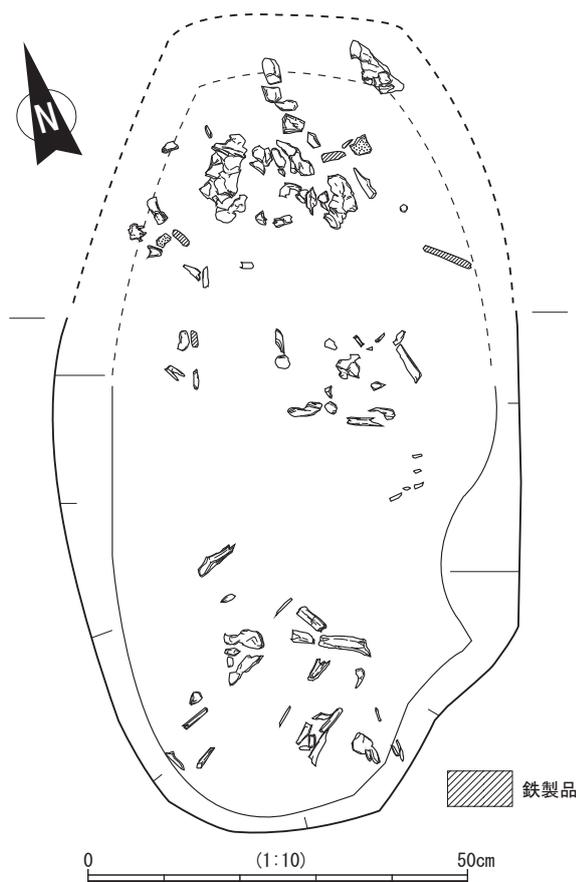


図5 火葬墓 (SK145) 平面図

事実から、墓壙の上面は後世の造成時に、削平を受けた可能性が高い。

墓壙の埋土である②層の中位で、人骨の上端が検出された。②層は焼けた人骨とともに、炭化物や焼土を多量に含んでいることから、この遺構が遺体を焼いたその場所であると考えられる。また、人骨の周囲からは、釘と思われる鉄製品数点が見つかっていることから、木棺を使用したと推定される。こうした鉄製品のほかに、木片が検出されているが、これは木棺の部材あるいは薪の燃え残りと考えられる^{註1)}。これらの事実は、まず墓壙内に遺体を入れた木棺を置き、そこで燃料となる薪を積んでこれを焼いた後、土をかけて埋めたという埋葬のプロセスを示している。

人骨は遺存状態が良くなく、頭骨・骨盤・肋骨・椎骨・四肢骨などの小片が少量得られたにとどまるが、後述するように、成年前半の男性であることが判明した。人骨の整理作業を行った結果、明らかとなった部位の出土位置を図に示す

と、図7の通りである^{註2)}。以下、これにもとづいて、人骨の出土状況を述べる。

部位の判明した人骨は分布上、大きく三群に分けることができる。これら三つの群を北から南に向けてⅠ群・Ⅱ群・Ⅲ群と呼ぶこととする。まず、最も北側に位置するⅠ群では、右側頭骨および右側の顔面部がまとまって出土している。また、右側頭骨の関節窩と右下顎骨の関節突起部が関節状態を保ってはいないが、近接して出土している。右頬骨や右側頭骨も近接している。このように、各部位は関節状態を保ってはいないものの、大きく動いているわけでもないことが分かる。

Ⅰ群の南側に位置するⅡ群では、右寛骨と仙骨が前面を上にした状態で出土している。右大腿骨頭は、寛骨臼から外れているが、右寛骨の大坐骨切痕付近から出土している。右踵骨・右距骨もこの付近から出土している。このように、各部位は関節状態を保ってはいないものの、大きく動いているわけでもないことが分かる。

最も南側に位置するⅢ群では、椎骨・肋骨・左上腕骨・下顎骨・頭蓋骨の小片がまとまって出土している。ここでは、頭蓋骨でも主に左側顔面部、左上腕骨が出土していることが注意される。これは、土層断面で確認されたように、墓壙の上面が後世、削平され、それに伴い、もともと北側のⅠ群辺りに位置していた頭蓋骨の左側顔面部、左上腕骨が、この地点まで動かされたと判断される。

以上の人骨各部位の出土状況から、遺体の頭位方向および埋葬姿勢は、次のように復元できる。まず、Ⅰ・Ⅱ群でみられる頭骨・骨盤・下肢骨の位置関係にもとづけば、遺体の頭位はおおむね北をとつ

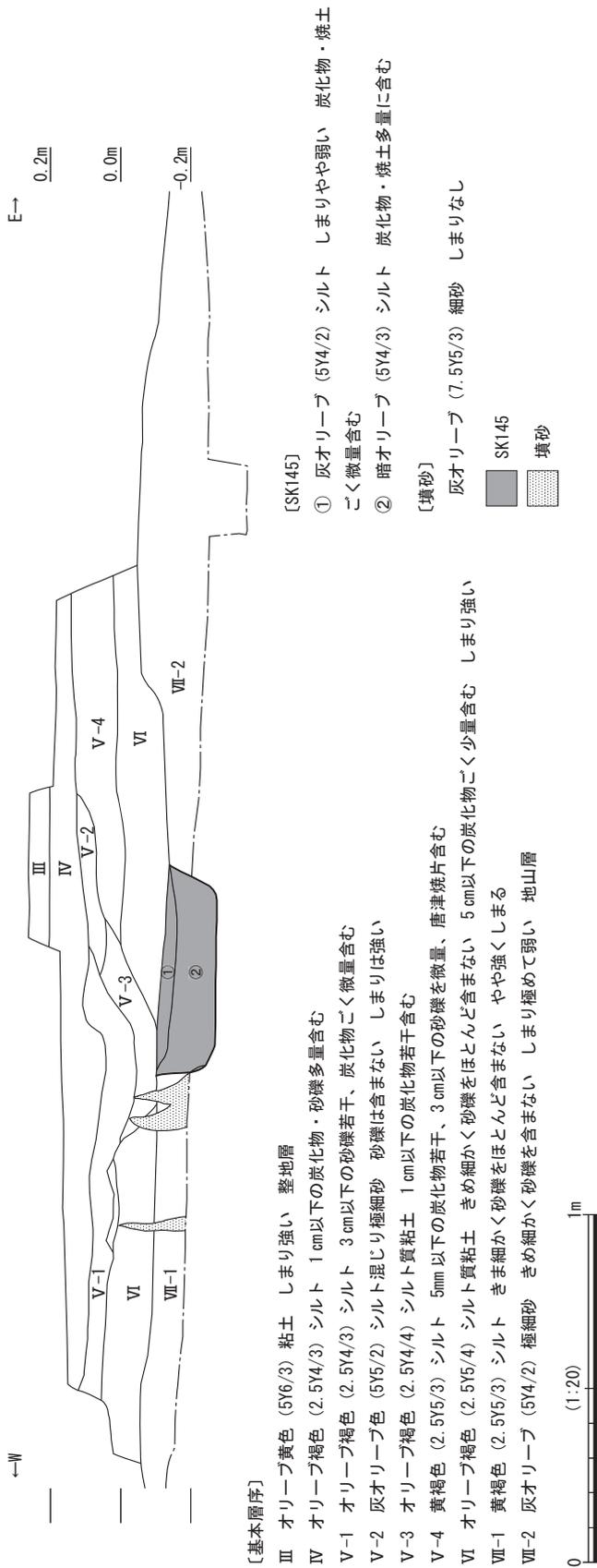
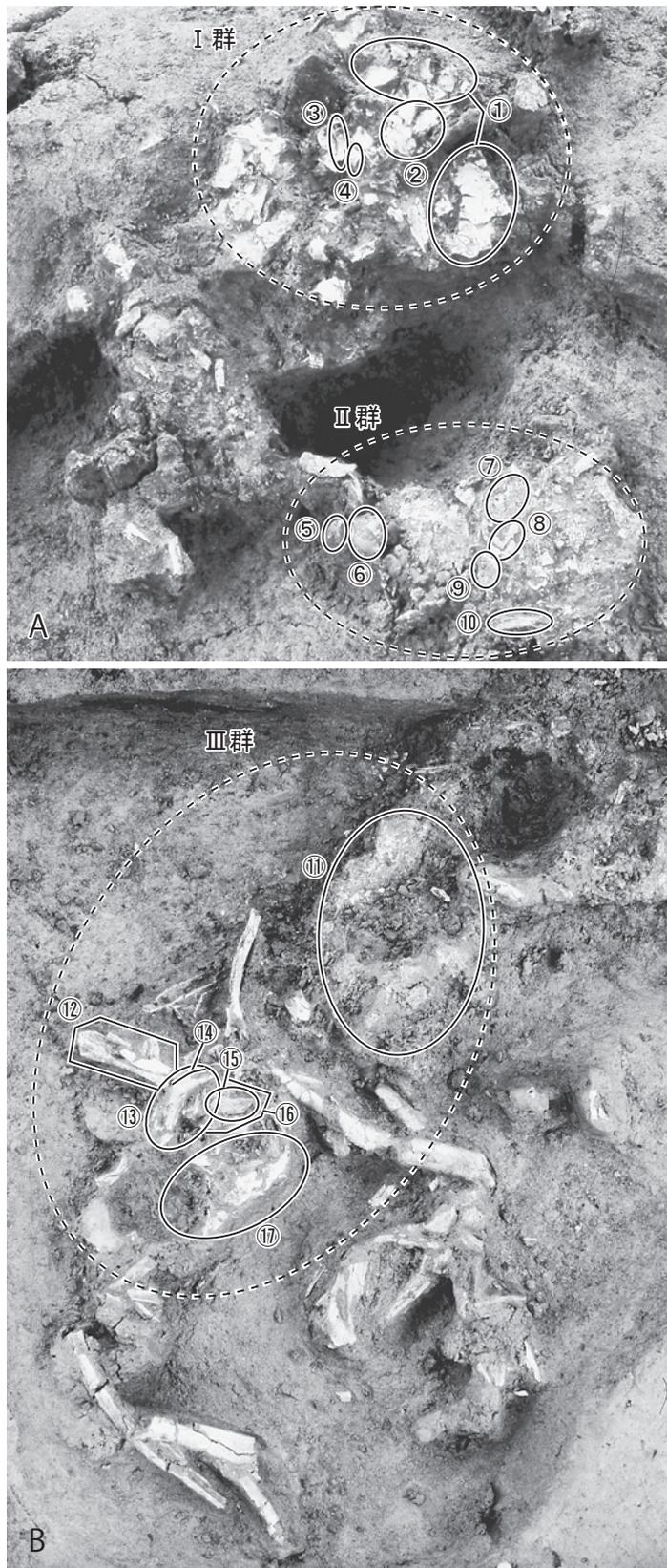


図6 火葬墓 (SK145) 付近の土層断面図



- ① 頭蓋骨
- ② 右側頭骨の乳様突起付近
- ③ 右下顎骨関節突起
- ④ 右頬骨
- ⑤ 右距骨
- ⑥ 右踵骨
- ⑦ 右大腿骨頭
- ⑧ 右寛骨
- ⑨ 仙骨
- ⑩ 肋骨
- ⑪ 椎骨・肋骨
- ⑫ 左上腕骨（西側が遠位）
- ⑬ 下顎骨（左側が右側の上に位置）
- ⑭ 下顎枝
- ⑮ 左側頭骨の乳様突起
- ⑯ 頭蓋骨（主に左側の顔面部）
- ⑰ 頭蓋骨

図7 火葬墓（SK145）の人骨出土状況

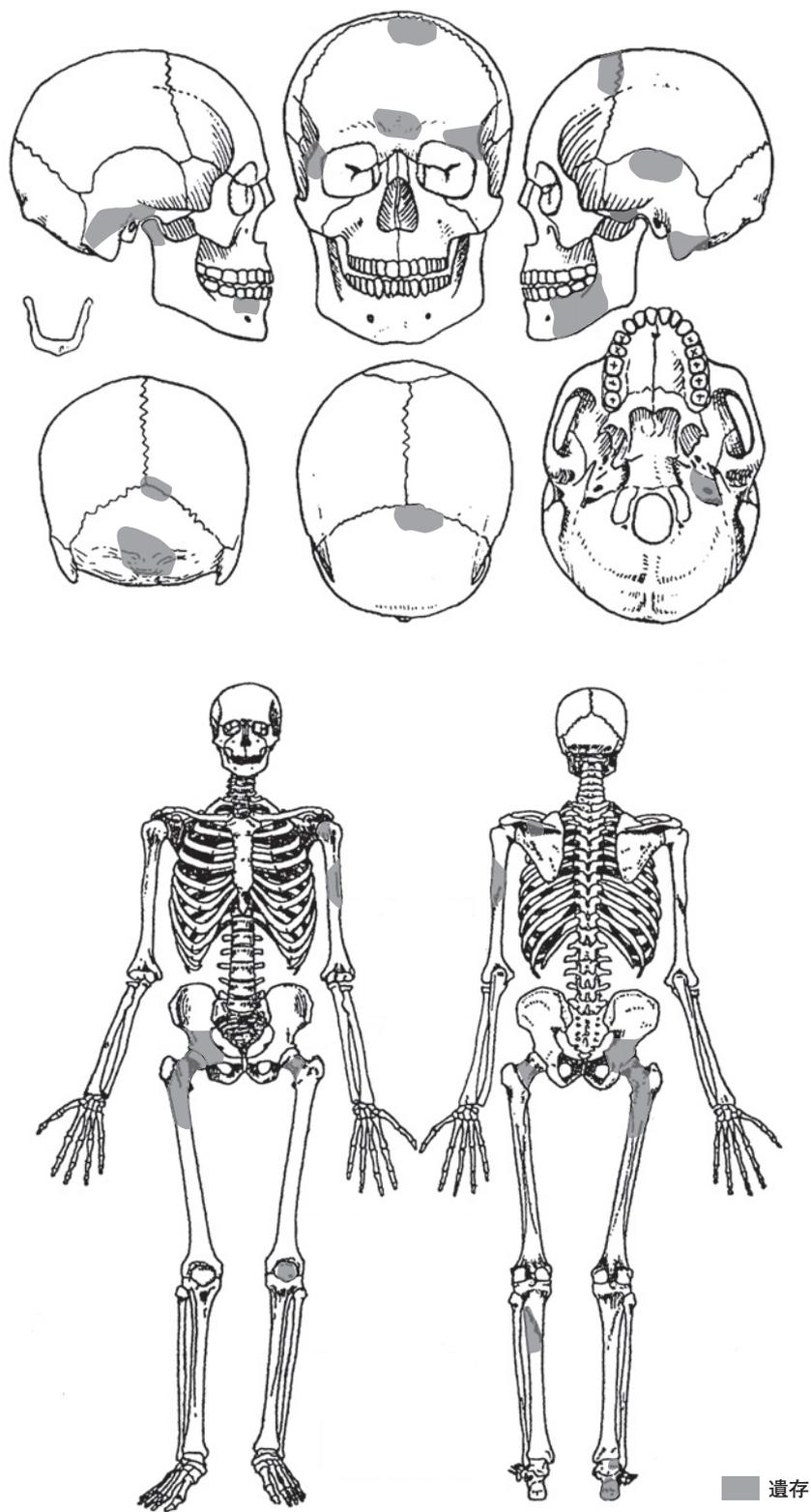


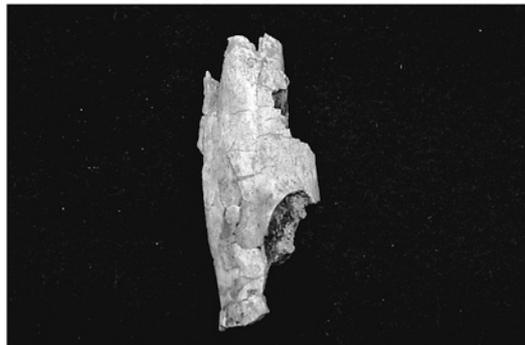
図8 人骨の遺存部位



左側下顎（頬側）



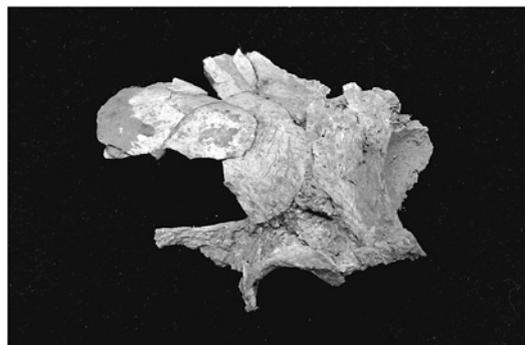
右側下顎（舌側）



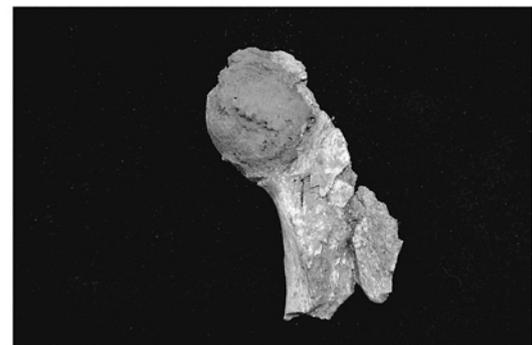
左側上腕骨骨体



左側側頭骨乳様突起部



右寛骨



右大腿骨頭



右側側頭骨乳様突起部・頬骨・下顎骨関節突起

図9 遺存した人骨

C 特記事項

左側第一大臼歯と第二大臼歯が閉鎖している。本人骨の年齢を考慮すると、う蝕などの要因で生前に歯を喪失し、歯槽骨が閉鎖したと考えられる。

4. 火葬墓の被葬者像と造墓の背景

さて、以上の検討結果をふまえ、この火葬墓の被葬者像、およびこれが造られた背景に迫ってみよう。まず目を引くのがこの墓が造られた場所である。調査所見からみて、単にこの場所を火葬場としただけでなく、火葬後にそのまま埋葬の場としたのは間違いない。先述の通り、本地点で検出された溝と絵図との対比によって、この火葬墓は屋敷地内に位置すると考えられる。これは、通常、近隣の寺院が管理する墓地に遺体が埋葬されたとみられる近世武家の葬送習俗とは明らかに異なり^{註4)}、極めて特異な「場の選定」とみなせる。

こうした「場の選定」には、積極的選定と消極的選定の二者が考えられる。まず、積極的選定の事例としては、土地開発者たる先祖を埋葬し、子孫の土地継承を守護すると信じられた中世前期以降の屋敷墓があげられる。これは現行民俗の屋敷神までつながるものとみられている(勝田1988)。しかし、常三島の屋敷地は藩主から拝領されたものであり、こうした開発先祖信仰が発生したとは考え難いため、このケースをそのまま当てはめるには疑問が残る。しかも、本火葬墓の被葬者の年齢は成年前半であり、死後に信仰対象となった先祖とみるにはやや若すぎる。

そうすると、もう一方の消極的選定に目を向けざるを得ない。すなわち、何らかの特別な事情があって、亡くなった人物を通常の墓地に埋葬できず、屋敷地を埋葬場所に選ばざるをえなかったという考え方である。それが具体的にどんな事情によるものか、言及するのは困難だが、被葬者の生前の社会的属性、あるいは死因自体の特殊性によって、埋葬の場として屋敷地が選ばれたのだろうか。本火葬墓の位置する屋敷地は、藩士譜に名を残していない人物ばかりが居住していたことも気になる点である。こうした事実と、この墓が造られた背景との間に何らかの関係があるのだろうか。

それでは、火葬の採用についてはどうであろうか。文献史学の立場からは近年、都市と農村、階層差、宗派、個人の思想といった様々な観点から、採用要因の多様性が示されており(木下2012)、遺跡から得られた情報だけで、それをしぼり込むことは困難である。ただ、これまでの考古学研究の成果をふまえれば、その系譜関係を示すことは可能であろう。

山口県吉母浜遺跡では、本火葬墓と類似するスタイルをとる中世の火葬墓19基が検出され、民俗事例の中に見いだせる火葬法が、室町時代にすでに行われていたことが指摘されている。これらを調査した田中良之は、常民の間では野天に穴を掘り(土井・佐藤1979)、薪や藁をおき、棺の上にも積み上げて火をつけ、すっかり焼けると翌朝は骨拾いをする(井之口1977)という現代に残された火葬習俗に類似性を見出し、両者が系譜関係にある可能性を示唆した。そして、現代の火葬において「のど仏」として不可欠とされる第2頸椎が、火葬墓すべてにみられなかったことを見出し、拾骨を行った可能性を認めた。さらに、西日本各地に吉母浜の火葬墓とほぼ同じスタイルの墓が造られた背景に、「政治権力の規制を受けない情報系として機能していた真宗教団」との関連性を考えた(田中1985)。

本火葬墓では、拾骨を行った積極的な証拠を見出すことはできないものの、火葬習俗としては系譜を同じくする可能性があるだろう。

そのほか大分県吉松遺跡でも、本火葬墓とよく似たスタイルをとる中世（15世紀後半～16世紀前半）の火葬墓11基が検出されている。これらは頭位が北向きで、右側臥屈葬のものがほとんどであるが、こうした特徴は本火葬墓と共通する。また、墓壇内からは火葬人骨、焼土、炭化した薪とともに、多量の藁灰が検出され、灰化したムシロ状の編み物が遺存していた例もあった。民俗事例での火葬法では、「多量の薪木と藁を必要とし、またぬれむしろをかけるのがよい」とされるので（土井・佐藤1979）、吉松例でも先述の吉母浜例と同じく、こうした方法をとって行われたとされる（佐藤1988；渋谷・佐藤1988）。本火葬墓では、藁灰やムシロなどの痕跡は確認されていないものの、調査所見からみて、やはり民俗事例に類する方法をとったと考えられ、系譜を同じくする可能性を指摘できよう。

なお、本火葬墓は出土人骨の検討により、成年（前半）・男性の埋葬例であることが明らかとなった。吉母浜例は成年、吉松例は成人もしくは成年のものであり、対象とする年齢層においても三者は共通していることを書き添えておきたい。

おわりに

以上、常三島遺跡第3・5次調査出土の火葬墓の被葬者像と造墓の背景について考察を行った。その結果、何らかの特別な事情で屋敷地内に埋葬された人物像が浮かび上がってきた。また、民俗事例として現代まで残存し、時代をさかのぼれば室町時代まで確認されている火葬習俗と系譜を同じくする可能性を指摘した。筆者の力量不足により、近世史学、近世考古学の研究蓄積を十分に活かすことができず、論じ足りない部分が多々あるものと思われる。大方のご叱正とご教示を請うものである。また、考古学的な事実については、あくまで現状の認識にしたがっており、正式報告書の刊行に際して、変更があれば、それにもとづき再考したい。なお、火葬墓から出土した人骨は九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座、そのほかの遺物は徳島大学埋蔵文化財調査室で保管されている。人骨のクリーニングにあたっては、九州大学の田中良之教授、福永将大院生からのご協力を賜った。本稿の内容は2016年2月、考古フォーラム蔵本で発表した。席上で近藤玲・中村豊・三阪一徳・脇山佳奈の諸氏から有益なご教示を賜った。末筆ながら、記して感謝の意を表したい。

本稿は第3章を米元が、それ以外を端野が執筆し、全文の調整は端野が行った。

註

1. 整理作業の過程で、人骨とともに取り上げられていた墓壇埋土中から、調査時に確認されていた鉄製品とは別に、鉄製品数点と木片が検出された。また、墓壇埋土を水洗選別した結果、魚骨と思われる小片も検出された。
2. 人骨の整理作業を担当した米元が作成したメモをもとに、端野が作成した。
3. 国立科学博物館・坂上和弘研究主幹によるご教示。
4. 常三島の武士集団の墓地がどこにあったのかは未調査である。今後の課題としたい。

文献

- 勝田至, 1988. 中世の屋敷墓. 史林 71(3), 375-410.
- 木下光生, 2012. 近世の葬送と墓制. 勝田至 (編), 日本葬制史. 吉川弘文館, 東京, pp. 180-246.
- 佐藤良二郎, 1988. 宇佐の中世墓. 大分懸地方史研究会 (編), 大分懸地方史. 大分懸地方史研究会, 大分, pp. 49-64.
- 渋谷忠章・佐藤良二郎, 1988. 中世墳墓の地域的様相 九州. 考古学ジャーナル 304, 20-22.
- 鈴木隆雄, 1996. 日本人のからだー健康・身体データ集. 講談社, 東京.
- 鈴木尚, 1985. 骨は語る 徳川将軍・大名家の人びと. 東京大学出版会, 東京.
- 田中良之, 1985. 中世の遺構. 村田多津江 (編), 吉母浜遺跡. 下関市教育委員会, 下関, pp. 31-100.
- 徳島大学埋蔵文化財調査委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室, 1997. 徳島市常三島遺跡埋蔵文化財発掘調査実績報告書 工学部光応用工学科棟. 徳島大学埋蔵文化財調査委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 土井卓治・佐藤米司, 1979. 総論. 土井卓治・佐藤米司 (編), 葬送墓制研究集成第1巻 葬法. 名著出版, 東京, pp. 11-35.
- 平井松午, 1995. 城下町起源の都市徳島. 寺戸恒夫 (編), 徳島の地理. 徳島地理学会, 徳島, pp. 179-181.
- 平本嘉助, 2004. 江戸時代の身長と棺の大きさ. 江戸遺跡研究会 (編), 墓と埋葬と江戸時代. 吉川弘文館, 東京, pp. 201-223.

【追記】

本稿の内容は本来、私（端野）からの依頼をお受けになった田中良之先生（九州大学）が人骨の整理作業をご担当され、その結果をもとにご発表される予定であった。しかし、先生の突然のご逝去のため、人骨の整理作業、所見の文章化については米元が引き継ぎ、それ以外については私が先生に代わって作成することとなった。博識・聡明な先生の代わりが務まったはずもないが、読者諸氏にはどうかご容赦いただきたい。

先生が旅立たれてからもう10か月が過ぎてしまった。学部から大学院に進学して以来、10数年、先生の研究室に居座った私には、厳しくも楽しかった先生との思い出は数え切れないほどあり、とてもここでは語りつくせない。授業はもちろん、研究室でのコーヒープレイクや飲み会の場での先生のウィットに富んだトークから、学問をするための「センス」（本来は学習して得られるものではないのだが）を学んだような気がする。私は先生のご専門とする古人骨や縄文土器を専攻する学生ではなかったが、いっしょに様々な場所に連れて行っていただいた。今日、私のフィールドの一つとなっている韓国に導いていただいたのも先生であった。大学院を出た後も私はあれこれと立場を変えつつ九大に長く在籍し、身近で先生から、学問だけでなく人として生きていくための多くのことを学ばせていただいた。

徳島大学に赴任し、しばらくして私は、長年にわたってご指導いただいた先生に少しでも恩返し

できないかと思い始めた。先生を人骨の整理作業のため、徳島にお呼びしたのもそうした思いからであった。いや、ようやく一人前になった姿を先生にお見せしたいというエゴからであったにちがいない。実際にお越しいただいたものの、こんな資料のために先生をわざわざお呼びして良かったのだろうかと内心、後悔の念でいっぱいであった。作業を終えた先生を空港までお送りして、保安検査場入口前で、あの何とも言えないご表情で「なかなか面白かったぞ」と言っていたとき、ほっと胸をなでおろしたのをおぼえている。思えば、先生からこうしたお言葉をいただくことで、これまで私は考古学を続けてこられたのかもしれない。その後も何度か徳島にお越しいただくことを考えていたが、それも叶わなくなってしまった。

先生、天国ではどうかごゆっくりお過ごしください。

(2016年1月5日、端野晋平)



2014年8月26日、徳島大学埋蔵文化財調査室にて人骨の整理作業を実施される田中良之先生。手前は福永将大院生。